

夢

藤原鎮男

平塚キャンパス10周年記念
理学部オール教員・卒業生懇談会講演要旨
平成10年11月1日

趣旨

「夢」という題で最初の本を書いた科学者はケプラー（1571-1630）のようである。彼は惑星の位置の精密解析でニュートンの万有引力発見の基礎をつくった。その彼は晩年、神の世界、すなわち、神秘の世界と人間の世界の一体化を考えて、「夢」という題でこの著作をしたのではないかと思う。敢えて推察が許されるなら、彼は、我々人間を、<未知の世界と既知の世界の二つの世界の上に乗って知の発展をはかる存在>と認識したのではなからうか。それは、経験による知をまとめ、同時に、未来の知の開拓を我々の使命に課すのである。

その作業を営む”場”が大学であると今日は定義し、わが理学部10年を考え、未来を開拓する夢を画がいて見たい。神奈川県が、60周年記念事業として平塚キャンパスを建設したのは、かまえた言い方をすれば、この”場”づくりだったと言えよう。

ただし、実際上は、もっと卑近な具体的理念に立っていたことはもちろんである。

1 理学部の理念

：対外的意義・当時理学部を持つ私大は東京理科大学と立教大学のみであった。この状況において神大が理学部を持つことは、私学として命名を上げる一つの道であると認識されたのである。そしてその東京理科大も立教大も、その理学部は「理」の理学部であり、現代の今、創設する我々の理学部は、それらと一線を画すものであるべしと我々は考えたのであった。彼らの理学部は縦て割り学科の集合である。それでは時代の趨勢にそぐわないと思ったのである。何故かという、現代の科学技術の大勢は、理工総合の、かつ産学を包含する科学技術を指向しており、科学技術時代の高等教育には、その線に沿うものが求められていると考えたのである。この考えで学部構成も企画された。1998年の現在、わが国の学術は全くこの線に沿って動いていると認識され、当初のこの考えは妥当だったと思う。ただし、現実の現在は遺憾ながら、むしろ、この逆の方向に向かっているかに見えるのである。もう一度、原点にもどり、夢を持ちたいものと思う。ともあれ、発足時の原点の状況をここで振り返ってみよう。

学部の構成：

<学部一体>指向

我々は、なにぶん小さい学部だし、歴史がない学部であるから、学部三学科が一体で協力する形の運営がなされるべきであり、それが力を強める道だと思った。時代とともに変化があるのは当然であるが、これは10年経った今も動かぬことだと思う。

当時、考えたのは、<専門研究者の単なる集合体であってはいけない。それでは、伝統を持つ大きな大学の組織に太刀打ちできない。立つ道は、皆で力を合わせて仕事することだということ>のである。新設時に理学部が標榜したことは、少数の教員で、広い理学をカバーしなければならないのだから、狭い専門家の単なる集合では学部を構築し得ない。三学科が個別、孤立していたのでは駄目であり、弱体になる。重疊し、協力しあうことが必要だと考えたのである。このことは、もちろん個々のメンバーが自分の専門を保持し、確立することとは別である。各個人が研究者として立派に立つべきことは言うまでもない。ただし、そこでなお、皆が、学部メンバーとして、学部全体の運営に心を向けてほしいと要望されるのである。

具体化

このことの実際化が、「教育のカリキュラム」の作成作業の共同化と、「専門基礎」の設定である。具体的には、横断的な連絡の上で理学部の三学科のカリキュラム作りをし、また、卒業生全員が、数学、物理学に強く、また情報基盤の教育を受けていることを標榜した。この専門基礎の上に各学科の専門課程が出来ることを意図したわけである。この考えは時代を先導するものであったと思うし、今、社会から求められている高等教育であると思う。外国の大学も今それを目指しているし、わが国でも多くの大学がこの線を歩んで専門基礎の充実を唱っている。ただし、どこも旧来の立て割りの意識の教員で実効がなかなか上がらぬようである。

我々の場合には、強力な数学と物理の専門基礎が実現し、また情報教育の充実があった。例えば、創設の初年次に100台、次年次には200台の端末を擁した教養レベルの情報教育が実施された。このような教育を実施した大学は当時の日本では唯一であり、多人数教育の旧制の大大学はもちろんのこと、私立大学においても、全くそれはなかった。しかもこれは経営学部にも実施されたのである。当時の関係教員とくに中山、松浦両助教授をはじめ、助手諸君の負担はたいへんなものであった。それが、ともかく動いたときは感激であった。関係の諸君の努力、お骨折りは忘れられない。これは、理学部・経営学を通じてのことであった。両学部の一体的運営、活動があつて出来たのである。箕輪、衣笠氏らとの協力も感謝であった。

ちなみに、両学部の連係、協同の意図による種々の試みも工夫された。<理工系学生のため>の語学教育、国語作文教育、あるいは、両学部の共同研究会、合同懇親会などはその例であった。

学部専門基礎教育基盤としての機器分析

現代の理工、科学技術の高等教育において、機器分析の役割は重大である。不可欠の要素であるといっても過言ではない。理学部の発足に当たってもっとも頭を悩ました問題は、<平塚キャンパスの一つの特長として、各種の先端レベルの機器を揃えたい。しかし、そのどれ一つをとっても、これを受け入れ、立ち上がらせ、それを作動させた上で、教育カリキュラムに組み込む>ことの困難さ、労であった。その解決には腐心した。古い伝統の機関で育った人は、長時間かかってポツポツと整備されるので、全体が動くのは自然である。それをいっぺんにするのは簡単ではない。しかも、教育の現場は待たないである。それが、何の故障もなく動いたのであった。それを創設時の極めて少数だった関係教員、助手諸君が見事に解決してくれたのである。無事に学事が進行したときは感謝至極の思いであった。この間の労苦は、機器分析を職分とする筆者自身にはよく分かることであり、人を得たという感を深くした。

教科書編纂：詳しい解説教材が書店の店頭に山積みされている今は、余りそれを理解出来ないかもしれないが、新しい抱負を盛った教育の教科書を新たに執筆し、また使われる新型の機器を、実際のカリキュラムに取り入れた、指導書の形にすることは大仕事である。これが出来たのには、三学科の教員諸氏の連携、協力があつたためである。これは、教員の和、協力によるもので、一面、少人数の私大の人的力を強めるのに有効なことと思う。ただし、それが実現するには、辛抱強い、そして練達な人材が必要である。また、それを支える事務局がなければならない。それが、我々の場合にはあつたと思う。

個人の業績や効率が声高に唱われる現代ではあるが、私大の本命の命題は教育である。今の時代において、上記のことはもっとも留意せねばならないことのように思う。

学部の二層構造

大学の活動には、undergraduate と graduate、つまり、学部と大学院の二つのレベルの活動の併存が必要である。ところが、新設学部は、逐年、年次進行でそれがおぼつかない。それで、我々は、学部発足と同時に研究所の併設を願い、認められたのである。学部申請の上で人材プールのためという認識もあり、それも事実ではあるが、それだけではない。

我々の場合には、さらに、積極的な目的を意図した。その意図には二つあつた。一つは、三学科協力の活動の場として、それから、もう一つは、大学と社会の協力・共同の活動をする場としてである。とくに後者は、産官学を包含する社会に開いた大学院レベルの活動を行う場にしたいと思つたのである。

それで、研究所の名称としては、「知識情報研究所」の名を選んだ。その理由は、それが現代の科学技術を包括し得ると考えたからである。この名称は現在、総合理学研究所と改称されているが、この名前は創設のときの考えとは少し違う感じである。

さてこれから本論。

夢 1 平塚キャンパスから日本を代表し、世界に轟く研究業績が現れることは衷心からの願いである。その目で見ると、すでに理学部には極めて顕著な研究業績が続出している。ただし、良い悪いは別にして、テレビや新聞のメディア面では今一息である。この点、学部発足のとき平塚と一緒に来られ、マラソン指導にあられた事務局の工藤氏は、箱根駅伝の全国制覇を10年前我々に誓つたのを思い出す。これには先を越された。

ただし、地味だが全国トップの実績はいくつもあるのである。例えば、先に述べた、端末を整備し、画期的なレベルの教育を実施した専門基礎の教育である。さらに、発足2年の時点で、情報学科の専門課程がワークステーション100台で教育を進めたことなどは、当時のわが国の高等教育では抜群のレベルのことであつた。筆者はここで退任したが、その成果は確実に学生に反響されたと思う。私大の教育として、これは、わが国で当時、もっとも先導的なものであつたことは確かであり、官学は当時はまだ中央集中路線であつて、我々のような各個人を対象とする分散型情報教育にはほど遠い状況だつたのである。当時の平塚神大の教育整備の実体は、全国に大いに誇つてよいものだつたと思う。ただし、この事実は、当の学生、教員、大学自身にその自覚がなく、もちろん、社会にPRすることもなく、あたり機を失ってしまった。その後、頸すを接して他大学がこの路線を歩み以後は抜かれてしまった観がある。これには原因があり、対外広報が学部横並びを第一とし、また、平塚突出を好まぬ風潮があつたことによることは否めぬが、わが非力をお詫びせねばならぬ所でもある。ともかく、事実として、対外的に神大を売り出す機会を失ってしまったわけで残念な次第であつた。

ただし、これらの経過は、無形ではあるが十分評価されていたことである。それは、例えばつぎのような事があげられる。国内他大学へのインパクト：我々の理学部の創設の企画は、その後相いついだ他の私立大学の理学系の学部学科の創設の先導となり、影響を及ぼしたと事実思われる。とくに研究所を同時に併設し、またそれが企画する研修フォーラムは有益な社会活動としての実体が定着した。とくにこれらの活動は、当該大学自身の学界的ステイタスの広報に著しい効果がある。慶賀であり、関係者のご努力を多とする。ただし、大局的に見れば、平塚キャンパスは小規模であり、何といても若いから、横浜キャンパスとの連携、協力を努めるべきである。

夢 2

企画

現代の私立大学の活動には、現役の大学人、卒業生、それに社会の三者が一体となった展開を考えるべきである。その意図で具体的にいくつかの企画を立てた。前記のフォーラムはその一つであるし、次もその一つである。昔の夢をここで述べることをお許し願いたい。

その骨子は、宮陵会100万の卒業生や、県ならびに平塚市という公共団体と共同で行う大学活動の夢である。これは私大経営の一面としても展開すべきものと思う。具体的には社会教育への展開である。

情報学研修

(A) 神奈川県中学高校教員のための情報学研修

内容： 設備は神大平塚キャンパス情報施設を用い、テキストは、現在、大学が学生用に編集したテキストを手直しする。これは、神奈川県、ないし、平塚市の教育行政の一助にもなろう。したがって、県や市の協賛ないし公式の共同事業の形をとることも可能となろう。

説明： 現在、平塚キャンパスが持つ計算機端末、ワークステーション、などの設備は200ないし300人の実習に耐える。それが、夏期休暇ごろは7、8、9月には休状態になる。これを活用しないのはもったいないことである。

文部省は中高の学校教育に「情報学」の課程設置を義務づけた。ところが、これを担当する教員がいない。それで至急にそれに当たる教員の整備をはかる必要に迫られている。この教員の研修コースを我々が引き受けるのである。

神奈川県の中高の学校の教員のうち、神大の卒業生の数は2千ないし3千名にのぼるであろう。本学の卒業生の再教育の応援にもなり、県や市に対しても有効有益な事業にもなることと思う。それ故、十分な準備があれば、県や市の公的事業費の支出も可能であろうし、県、市、宮陵会の共同事業としてもよいのである。

この実行には教員の協力を得なければならない。けれども、外国の大学が、夏期の三ヶ月は休暇として、その間に同種のコースの教育に当たる教員には俸給とは別個の手当を出している。このような時間と人数で計算する別枠予算を工夫することになれば、教員、職員への臨時手当になるであろう。

また、県や市の事業となれば、公共の予算支出も期待できるのではあるまいか。

経営面での経済的寄与はそれほど大きな額にならぬかもしれないが、私学が地域の公共教育に貢献するという意味で意義が大であり、本格的に県や市の教育に参画するということになれば、より桁の大きな予算規模の事業費の協賛も望み得るのではないかと思う。

(B) 宮陵会会員再教育のための情報教育

(A)と同じ趣旨で、卒業生100万人のために、情報学研修コースを企画するのはいいかであろう。中小企業の経営者に大学が応援するのである。

夢 3

平塚市民の体育施設としての大学解放

平塚市に家庭婦人、老人のための体育施設の活用を提案し、体育館、食堂の施設の活用をはかることを考えるべきである。

大学は年間7、8、9および1、2、3の各月は体育館や食堂が半遊休の施設になる。これらの設備は、市が自身で建設し維持するに耐えない。設備を大学が提供し、学生の利用とかちあわない時間帯に老人や婦人を市が専用バスでキャンパスに運び、運動施設を利用してもらい、食堂も適当な時間帯に解放し活用してもらおうのである。外国でその実例を眼にしたことがある。老人は若者の雰囲気につれ、若者はまた老人世代に接するので有形無形の意義があると当事者が自慢していた。実際、現場の様子は楽しげであった。

筆者は当時このことを平塚市長に話し、本学の体育の教員や経営学部のメンバーにも話したことがある。残念ながら結果は出ずにおわった。その原因の一つは、事務組織の負担増であろう。ただし、これも現在の延長で考えればその通りでできるはずはない。工夫が必要と思う。例えば、第三セクター型の組織を工夫したらよいのではないかと思う。市の福祉担当の部署が市長室と大学の事務局とで何等かの機構をつくり、大学が施設を出し、市が利用者の確保とそのケアを分担し、実際の担当には大学事務局のOBの出番を仰ぐような組織が工夫できないものであろうか。余分なほうまで夢が展開するのが夢の悪いところであるが、神大の事務局の人材は優秀真面目であり、愛校心に富んだ本学卒業生が多い。事務局を卒業された人材が、平塚市当局と協力して、この新ライフケア計画の青写真だけでも画いてもらえないものであろうか。小生は理学部創設の時点でこのようなことを着想し、実行方を理事会や県と市の当局にも打診したことがあったのだが、具体化を詰める時間がなく、話題として残してしまった。幸い本学には宮陵会がある。このあたりが主体になって、大学と県、市とで協力して、神大の次代の活動面を展開出来たらよいと思う。